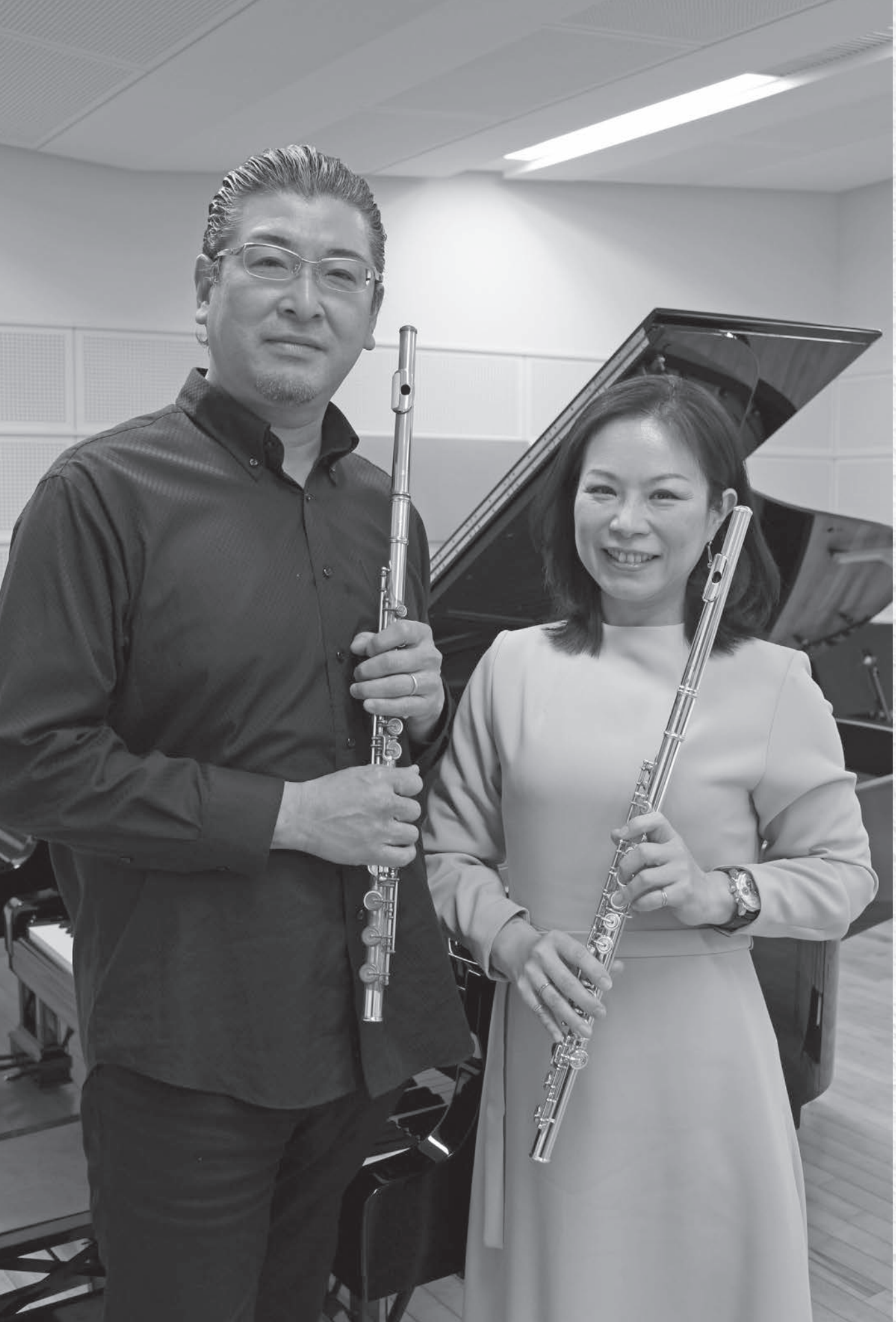


Seijun Takahashi & Harue Sugai

学生時代、どんなに激しく落ち込んでも…

同期生
フルート
対談

それでも私たちにフルートをやめる選択肢はなかった

共に国立音楽大学で教え、さまざまに揺れ動く音大生の心理を
誰よりもよく知る二人が自分たちの学生時代を振り返る。
菅井さん曰く「この話、20年前にしてたら良かったね!」。

取材協力：国立音楽大学　記事協賛：株式会社 グローバル

フルート奏者／国立音楽大学准教授

髙橋聖純

（たかはし・せいじゅん）東京都出身。15歳からフルートを始め、1997年、国立音楽大学を首席で卒業、矢田部賞受賞。在学中に日本木管コンクール、京都芸術祭第１回フルートコンクール（現びわ湖国際フルートコンクール）、日本管打楽器コンクールなどに入賞。1999年、シュトゥットガルト国立音大に留学。2001年、札幌交響楽団に入団、翌年から副首席奏者、2012年から首席奏者。2007年、びわ湖国際フルートコンクール１位。ソリストとして札幌交響楽団やウィーン室内管弦楽団と共演。2020年３月に札幌交響楽団を退団し４月から国立音楽大学准教授。フルートを大友太郎、岡崎明義、ジャン・クロード・ジェラール、パウル・マイゼンの各氏に師事。現在、国立音楽大学准教授。国立音楽大学附属高等学校非常勤講師、札幌大谷大学非常勤講師。

フルート奏者／国立音楽大学講師

菅井春恵

（すがい・はるえ）静岡県出身。中学１年からフルートを始め、静岡県立清水南高校芸術科音楽コースを経て1997年に国立音楽大学卒業。1992年、第１回静岡県フルートコンクール１位。1994年、同一般の部１位。2001年第６回びわ湖国際フルートコンクール２位。同年、第10回フルートコンヴェンションコンクール１位、併せてオーディエンス賞受賞。2003年、第19回かながわ音楽コンクール１位。フルートを大友太郎、パウル・マイゼンの各氏に師事。またJ.ゴールウェイ、C.ラルデ、A.リーバークネヒト等の公開講座で研鑽を積む。The Flute Ensemble K メンバー、西本智実プロデュース イルミナートフィルハーモニーオーケストラメンバー。国立音楽大学、洗足学園音楽大学各講師。2021年に無伴奏フルート作品のみを集めた1stアルバム『monologue』をリリース。

――お二人は国立音大の同期生で先生（大友太郎氏）も同じ。初めて顔を合わせたのは大学に入ってからですか？

髙橋　最初に会ったのは、高3の夏にあった受験準備講習会です。その前から「静岡にすごい子がいる」という噂は聞いてました。だから会ってすぐに住所を聞き、手紙を書いたんです。「どうやったらそんなに上手くなれるんですか？」って。

菅井　小まめに文通してましたよね、付き合ってもいないのに（笑）。

――かなりオープンですね。

髙橋　僕は昔から人見知りというのを全くしない人間なんですよ。菅井さんもちゃんと返事を書いてくれて。

菅井　タファネル＝ゴーベールの練習のやり方とか、何番と何番は絶対にやった方がいいよとか。私は静岡の音楽高校にいたんですが、高1の時に大友太郎先生を紹介して頂いて、定期的にレッスンを受けに東京に通ってました。

髙橋　僕が大友先生に会ったのは、その講習会が初めて。僕はフルートを始めたのが高校からと遅く、講習会に初心者用の教則本みたいなのを持って行ったら、みんなCDに入っているような曲やってるんですよ。ショックでしたね。CDの曲なんてプロが演奏するものだと思っていたから（笑）。

受験講習会で会ってすぐに住所を聞き、手紙を……

国立音大時代の髙橋さんと菅井さん。

どんなに下手でも上から目線

——高校から始められたのでは練習量も並大抵のものじゃなかった？

髙橋　練習しないと追いつけるはずがないと思ってましたからね。

——プロになりたい一心で？

髙橋　それだけは強かった！　だから常に上から目線でした。自分はどんなに下手だと思っていても、いつも上から目線。

——？？？？？

髙橋　要するに、ビッグマウスです。本気でしたけどね。高校時代、授業中は寝てるんです。昼休みになると、15分でご飯食べて、残り40分はロングトーン。午後の授業中も寝て、終わったら部活（吹奏楽部）。そのまま家に帰るのはいつも12時ごろ。翌朝は3時半に起床し、始発で学校に行って練習。

菅井　すごーい！

髙橋　そうやってると、そのうち朝起きられなくなりますから、そんな日は午前中から家で練習し、6時間目が終わる5分くらい前に学校に行って、「先生、寝過ごしました！」って。

菅井　ハハハハ。

髙橋　だから週に2～3回は職員室に呼ばれて「お前みたいなやつは社会でやっていけないぞ！」とか説教されるんですが、「いや先生、僕はそういう社会には行きませんから」って。これ、すごい上から目線でしょ？（笑）「なに言ってるんだ！」と余計怒られましたけど（笑）。

——自分なりの手応えや自信を持てるようになったのはいつ頃から？

髙橋　いえ、ずーっと劣等感を持ち続けていて、「とにかくみんなに追いつきたい！」とただそれだけ。みんなが学科の授業に出ている間が差を縮める唯一のチャンスだと思ったから、授業なんか出ないでずっとさらってたんです。

子供を産んだとき「私に足りなかったのは安心感だったんだ」と。

菅井　劣等感は、多分みんな一緒ですよ。私だってずっとそうだったから。今になって話すけれど、私は髙橋さんの体格が羨ましかったし、指も彼のようには回らないって……。この会話、20年前にしてたら良かったね（笑）。

髙橋　他の人のコンプレックスは見えなくて、良い所ばかり見えるんですね。それでも、ドロップアウトしようと思う選択肢は自分には無かったなぁ。

一番の転機になったのは子供を産んだこと

菅井　私は高校時代、いつも私の前を進んでいる子が誉められたとき、彼がなぜ誉められたのかが分からなかった。そのとき、「これが分からないと私はこれ以上先には進めない」と思ったんです。以来、大学時代は、誉められるところと足りないところを自分で精査して、何が必要なのかをいつも考えるようにした。ただ本番の時だけは、自分の良いところを見て演奏しようと。そうしないと、しんどいですからね。

大学を出てからもそれは同じでしたけど、私にとって一番の転機になったのは、たぶん、子供を産んだことです。結婚して子供を産んだとき、「ああ、私が演奏するときに足りなかったのは安心感だったんだ！」と……。それまでは、「もしここで失敗したら私には行く場所がない」と思っていたのが、子供を産んだら、「私には帰るべき家があるし、私が必要とされている」というたった一つの安心感で、何か知らないけれど、少し肩の荷が下りた感じがしたんです。

髙橋　あのとき、子供生まれてすぐ、ポンポンとコンクール二つ受かったでしょ。僕が札響に入ったばかりの頃で「やっぱ

対談中、二人とも子供時代にお囃子をやっていたことが分かった。髙橋さんは江戸囃子で有名な小金井市の「貫井囃子」で篠笛を吹き、菅井さんは篠笛だけでなく鉦や太鼓なども経験したという。

り母になると違うの？　凄いよね！」って電話したのを覚えている。

菅井　２００１年1月に子供を産んで、コンクールで初めて本選を通ったのが5月。その年の8月にフルートコンベンションのコンクールで1位を戴いた。

――周囲の協力と理解がないと出来ないことですよね。

菅井　あの頃は「子供を産んだらフルートをやめる」という空気が今よりもっと強かったんです。私はそれが凄くいやで、「なぜやめなきゃいけないの？」と。そうした風潮を打ち破りたいと思ったし、後に続く人がたくさん出て来てくれればいいなとも。

フルートには先人がいらっしゃって、中野真理さんは出産後も変わらずに活躍していらっしゃる。「菅井さん頑張って！」と中野さんに励まされたことは力になりましたね。

髙橋　じつは僕もね、子供が生まれた時に「びわ湖」のコンクールを受けたの。僕の年齢で受けられる最後のコンクールだったし、1次で落ちても、頑張って子供を産んでくれた奥さんの骨休めの旅行が出来ると思って、生後2ヶ月の赤ちゃんを連れて札幌から受けに行った。そしたら、まさかの1位。子連れでコンクール受けると何かあるのかな？

菅井　四六時中フルートのことばかり考えている生活じゃなくなったのが良かったのかも知れないね。それと、私の場合は子供が出来ても「こうなりたい！」という目標がまだまだあったから、フルートをやめるとか、仕事にならないとか、そんな気は全然起きなかった。「何とかする！」って。

――お二人にとって大友先生はどんな先生ですか。

大友先生とマイゼン先生

髙橋　大友先生に出会っていなかったら僕の今は無いと思います。教える立場になってますますそれが分かって来た。

菅井　私もそう。大学で教えることになったとき、大友先生の何が凄いんだろうと考えてみたんですよ。一つ分かったのは、先生は「待つ先生」なんです。そして、今この時というタイミングで適切な言葉をかけて下さる。

私の場合、大学4年の時に父が亡くなりました。葬儀を終えて、翌日の朝、学校の3号館の前で練習していたとき大友先生がいらしたので、思わず「このままフルートを続けていてもいいのかな……」とつぶやいたんです。すると先生は「とにかく何も考えずにフルートを続けなさい」と言って下さった。あの一言は以後の私の起点になっています。

――パウル・マイゼンにもそれぞれ習われていますね。

菅井　大学4年の時に東京藝大に客員教授として教えに来られて、プライベートでレッスンを受けました。マイゼン先生はアイデアの宝庫でしたね。音階で音が転んでも、「転ばないように」とは言わずに、「君は今ここまでの息で吹いたけれど、もっとここまで続けた方がいいと思う」とか、指ではなく音を運ぶための息のことをおっしゃったり……一つの問題にいろんなアプローチをされる。それがとても参考になりました。

髙橋　僕、マイゼン先生が来日したとき、引っ越しを手伝ったんですよ（笑）。卒業後に僕もプライベートでレッスンしてもらいました。そもそも僕が買った2枚目のフルートのCDが、マイゼン先生のデニゾフとエマヌエル・バッハのCD。とにかく神秘的で美しい音で、「フルートってこんな音がするんだ！」と。その後、大友先生の講習会を受けたとき、「あ、マイゼンとおなじ音だ！」って。

僕はずっと自分の音にコンプレックスがあったんですが、マイゼン先生のレッスンで音のことを言われたことは一度もありませんでした。いつも「こうも吹ける」「こう吹いてみたら」と選択肢を幾つも与えて下さった。当時は半分くらいしかその意味が分からず、それこそ今もう一度レッスン受けたいくらいですけど、不幸にも一昨年お亡くなりになりました。

大友先生は待つだけじゃなく、絶妙なタイミングで言葉をかけて下さった。

アルタスALモデルを選んだ理由

――髙橋さんは２０２０年3月まで札響で活躍されましたが、札響での体験をいま振り返ると？

髙橋　無駄なことは一つもなく、とにかく貴重な経験を積ませてもらっ

た19年でした。学生時代はオケに全く興味がなかったんですよ。ところがドイツに行ったら、上手な連中はみんなオケで仕事をしている。ジェラール先生からもオケスタを細かくレッスンして頂くうちに、一度ドイツのオケのオーディションを受けてみようと思ったんです。その矢先、日本から電話が入り、札響がオーディションをやるから受けてみないかと。それまでも何度か日本のオケのオーディションに誘われましたけど、オケに興味が持てなかったからすべてお断りしてたんですよ。でも札響の時はオケに興味が出た時で、生まれて初めてオーディションを受けてみたら受かってしまった。それが僕の音楽家としてのスタート地点でした。

――オーケストラに入って吹き方が変わったようなことはありましたか。

高橋　一度、大きな転機を経験しました。2年目に副首席になり、ベートーヴェン第9の1番を初めて吹いたとき、第3楽章あたりでバテて音が出なくなってしまったんです。「ヤバい、このままだとあと2～3年しか持たないぞ！」と思った。

それで、一体何がいけないのかをチェックし直したんです。どこにどんな無駄な力が入っているのかなど自分に問いをいっぱい重ねていって、結果、楽器の持ち方や角度を変えたりと……それがすごく大きな転機でした。それでまあまあ吹けるようになったら、音の聞こえ方も変わったんですね。気づいたら、立って吹く姿勢も学生時代とはほぼ真逆になっていた。

――どのように？

高橋　昔は下を向いて吹くような姿勢だったので左脚に体重がかかっていたのが、今は上体が起きていて、右脚に体重をかけて吹いている。ただし、これは人によってタイプが違います。

――楽器選びにもそうした体験は影響していますか？　お二人ともアルタスの「AL」を使っていらっしゃいますよね。

高橋　僕の場合、前に使っていたゴールドの楽器をオーバーホールに出したとき、違うメーカーのシルバーの楽器を使ってみたら、シルバーがオケでものすごく使いやすいことが分かったのがきっかけだった。それで最終的にアルタスの「AL」というモデルに行き着いたんです。アルタスの「PS」も前の楽器と違和感なく吹けて良かったんですけど、「AL」は今まで吹いたものとは違うタイプで、「もしかしてこの楽器を吹きこなせるようになったら、出来ないと思っていたことが出来るかも知れない」と思った。

「この楽器を吹きこなせるようになったら出来なかったことが出来るかも知れない」

菅井　私は中学、高校、大学とずっと違うメーカーのフルートでした。ところが、オケの1番の仕事を戴いたときに、なんだか思っている所に音が行かない感じがした。どうも音がハマらない。なぜだろうと、まずは自分を疑っていろんなことを試したりしたんですが、なかなか上手く行かない。それで「いっそ楽器を替えてみようか」と。

そんなとき、九州のフルートコンヴェンションで、ローナ・マギーさんと伊藤公一先生のデュオを聴いたんです。お二人ともアルタスを使っていらっしゃって、その最後の完全五度の和音が完璧だった。「うわぁー、私これいま出来ない」とすごくショックを受けて、もしかしたらそれが出来る楽器があるかも知れないと、コンヴェンションのブースに並んでいる楽器を片っ端から試奏していき、アルタスの「AL」に巡り会ったんです。周りでワーッと試奏する音が鳴っている中でも、自分の音が全部聞こえたんですね。私にだけじゃなく、人にもよく聞こえてくるって。それで迷いつつも思い切ってアルタスに替えたんですけど、後で人からも「その楽器、あなたの声に似ているね」といわれた。たしかに、歌曲の編曲ものが好きでよく吹くんですけど「喋るように吹けるって、こういうことなのか」と。

――「AL」の管体は巻き管ですね。

高橋　ええ。デリケートな楽器で、吹きこなすには技術が要求されます。この楽器をフルに鳴らせる吹き方を覚

「歌とか音楽の授業が大好きで、音大に行くとは思っていた」という菅井さんは、中学1年から吹奏楽部でフルートを始めた。「コンクール有名校で、システムがしっかりしていた」。高校は県立清水南高校芸術科音楽コースに進んだ。

高校1年（八王子高校）から吹奏楽部でバリトンサックスを始め、2年になる前に本格的にフルートのレッスンを受け始めた。「本当は中1の時にちらっとフルートのレッスンを受けたんですが、遊びたくてすぐにやめちゃった」

えたことで、僕はすごく上達した気がする。大ホールの客席で聴いた人も、ブルックナーやマーラーのシンフォニーのテュッティで僕の音がはっきり聞こえて来ると。この楽器を使えばもしかしたら自分が変われるかも知れない、というのが二人ともアルタスを選んだ動機の一つにあるよね。

菅井　うん、そこは同じですね。私はもともと息を細くして吹くので、本来の自分に一番楽な楽器に出会ったのかも知れません。

髙橋　いわゆる「鳴らすのが難しい楽器」ほど遠くまで音がよく通る、というのは「AL」を吹くとよく分かります。ステージで吹けばどんな楽器でも遠くまで聞こえますけど、要は、硬く吹いた、柔らかく吹いた、大きく吹いた、小さく吹いたという変化がきちんと後ろまで伝わっているかの問題。簡単に鳴りやすい楽器というのは、いろいろやっても遠くでは全部同じ音に聞こえるんですよ。

アンサンブルから学ぶこと

――お二人はフルートの指導でどんな点に重きを置いていらっしゃるのかを最後にお聞かせください。

菅井　国立音大の特徴の一つは、アンサンブルに重点を置いていることですね。

髙橋　アンサンブルの授業が1～2年生の必修になっています。コロナの影響もあって、今は二重奏から四重奏まで。

僕が担当する1年生の基礎アンサンブルの授業では、上手な人たちだけが固まらないようにメンバーの組み合わせをランダムにシャッフルしている。というのは、卒業後に地元でフルートで活動するようなとき、プロもアマもバラバラなアンサンブルの中に混じって吹くことも多いわけです。そんな時のためのコミュニケーション能力を身に付けて欲しいから。2年生のアンサンブルは菅井さんが担当し、特殊管を入れたり、編成も変えたり。

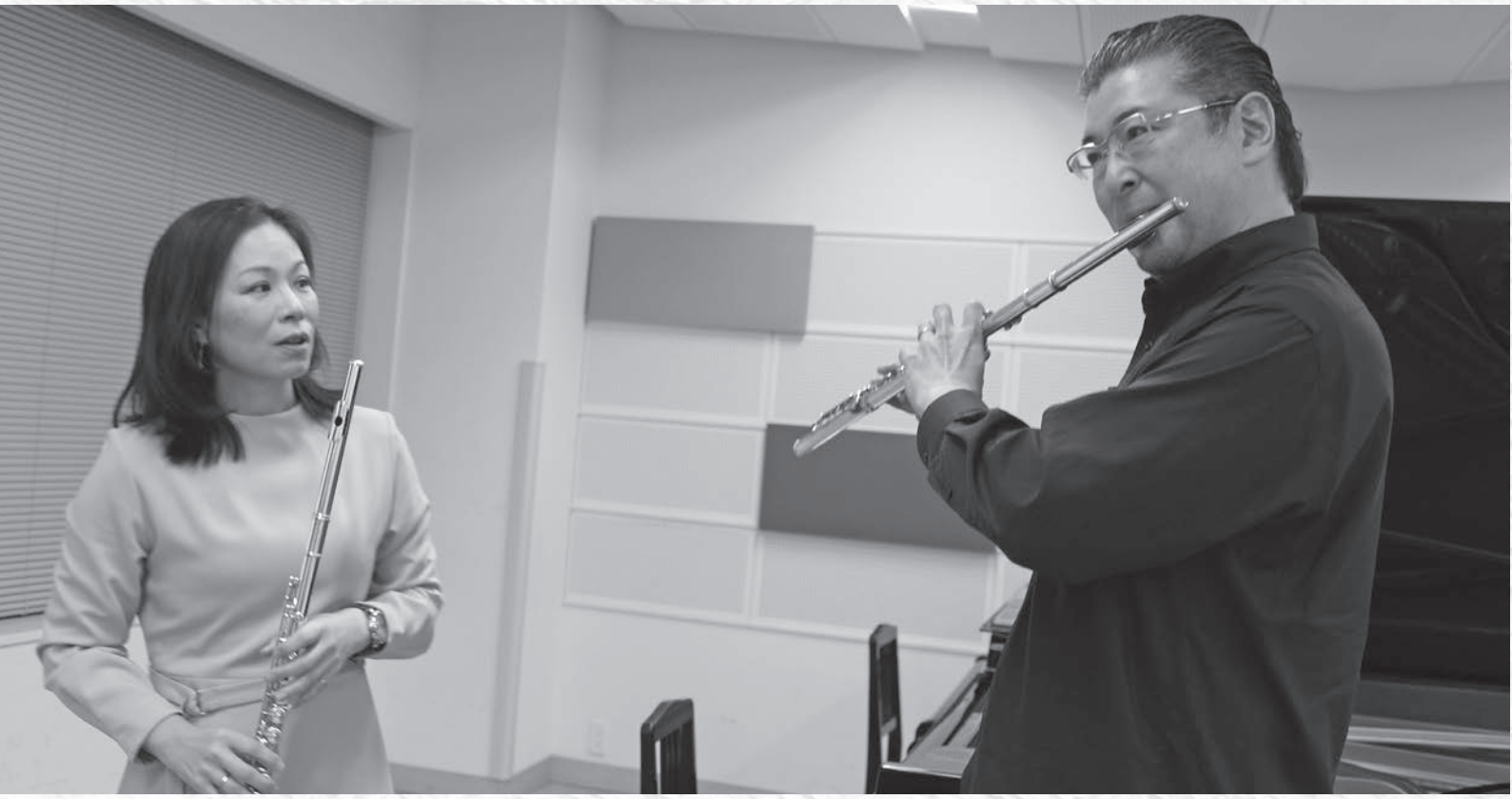
菅井　小さなアンサンブルで身に付けたことはソロにも生かせるし、吹奏楽やオーケストラの大きなアンサンブルでも必ず役立ちます。この大学の良い所は、こうしたカリキュラム間の垣根がないこと。先生どうしの情報交換も密で、学生に対する目配りやケアもそれだけ行き届いていると思います。

髙橋　学生の多くが女性で、何かあったときに、女性の目から見てどうなのかなどは、菅井さんにいつも相談に乗ってもらってます。

菅井　髙橋さんが着任してから、一緒にそうやって教えられることがすごく楽しく感じられる。なんだか大学時代に戻ったみたいで。私たちの学年って、ものすごくオープンで良い関係だったでしょ。

髙橋　そう。「あの学年だったから」とか「大友先生に出会っていたから」とか、不思議な巡り合わせがあって、僕たちは今ここにいる。今日は改めてそのことを強く感じましたね。■

この大学の良い所は
カリキュラム間の垣根がないこと。



髙橋さんは札響の首席になった頃に楽器をアルタスのALモデルに替え、菅井さんは2019年に博多であった日本フルートコンヴェンションでアルタスALに出会って以来愛用している。